



風の便り(第74号)

発行日：平成18年2月

発行者：「風の便り」編集委員会

夢の過疎対策構想 「森林ボランティア」は可能か！？

N 町から講演の依頼をいただき、担当者と打ち合わせをする中で本当のねらいは町の活性化と過疎対策にある事が分った。しかし、従来の生涯学習まちづくり論のほとんどは役に立たない。役に立たない理由は提案も実践も「単発でシステムにならない」こと、さらに「農山漁村に都市人口を継続的に呼び入れる事ができなかった」からである。筆者の知る限り、真に有効な対策はかつて国土庁が提案した「セカンドスクール」構想しかない。

1. 埋もれた国土庁構想—「セカンドスクール」

昭和50年、国土庁は「セカンドスクール」構想と銘打った調査報告書を刊行した。当然、当時の文部省を始め多くの関係者の目にとまった筈であるが、研究成果を具体化するための政策化の動きは筆者の知る限り皆無であった。

(1) 教育プログラムの抜本改革と過疎対策の統合

「セカンドスクール」は「セカンドハウス(別荘)」をもじった和製英語である。国土庁の発想は、教育課題への対応と過疎対策をドッキングしようとしていた。自然接触体験を欠損し、異年齢集団体験の機会を失った子ども達には「日常の学校」を離れた新しい教育活動の舞台が必要であった。そうした「必要」に対処するための、当時の文部省の発想は、「青年の家」であり、「少年自然の家」であった。しかし、そのどちらにも「過疎対策」の視点はまったく欠如していた。当然と言えば当然であるが、文部省は教育のことしか考えていない。それゆえ、地域活性化や国土の均衡発展は文部省の管轄外であった。地域の均衡的発展や過疎対策は国土庁の課題であった。もちろん、この当時、現在の「生活科」や「総合的学習」の

発想は提起されていず、歴史的に積み上げられて来た「合科教育」の視点は忘れられたままであった。文部省は、地域の発展と教育問題を重ね合わせた総合的視点は有していなかったのである。

国土庁報告は、教育界の優れた研究者が名を連ねた提言書であったから、当然、文部省においてもその研究成果は読まれたであろうが、教育分野の官僚が他省庁の提案に重きを置く筈はなかった。セクト主義は当たり前の時代であった。「国益」よりも「省益」と言われ、官庁の縦割りは甚だしく、「省益」優先真っ盛りの時代であった。かくして、教育施策立案の権限を有さない国土庁提案は日の目を見ることなく埋もれたのである。

(2) 「交流人口」の拡大

「セカンドスクール」構想の最大特徴は教育施策による「過疎対策」の視点である。セカンドスクールの物理的目的は、都市の学校の交流拠点を田舎の学校機能に隣接して創設することである。

構想では、都市から日帰りで保護者が行き来することのできる交通可能距離圏内の地方の学校と協力して宿泊・教育活動の施設を整備するというものであった。結果的に、セカンドスクールを訪れる子ども達は、過疎地域にとっては「交流人口」の確保を意味している。保護者が日帰りで現地を訪問できるという条件を加味したのは、小学校児童の発達段階や親の心情を考慮したものであったことはいまでもない。副次的ながら、過疎地にとっては、保護者の訪

問も「交流人口」の拡大を意味した。

セカンドスクールのプログラムに子どもがうまく適合できれば、結果的に、短・中期の山村留学の規模の拡大を意味する。交流人口の拡大は、都市と地方の交流を促すだけでなく、過疎の町村に経済効果を生み出す。わずかであっても宿舎や賄いの世話に関して雇用の機会も増大するであろう。義務教育レベルで予算化され、すべての市町村で「セカンドスクール」構想が動き出せば、都市と地方の交流は子どもを核として間違いなく活性化したであろう。その他考える限りの文化的交流、自然環境の保全、「合科教育」など、教育の新しい試みもセカンドスクールの自然発生的な副産物となるはずであった。

(3) 教育を活用した過疎対策路線の実質的崩壊

セカンドスクール構想は、学年ごとあるいはクラスごと、あるいは学校ごとの中期の集団移動・教室移動を想定している。それに対して、少年自然の家や青年の家は、単発的、固定的、部分的なプログラムしか提供できない。山村留学は、教育的発想に於ては類似の視点から出発しているが、制度的過疎対策という視点では、「個別」／「単発」の留学に過ぎない。山村留学生の実数は1校あたりわずか数人である。

都市の労働雇用能力、都市の華やぎと文化の魅力を検討すれば、都市の人口を過疎地に移動させることはほぼ不可能である。それゆえ、山村留学が長期の「定住」留学を目ざす限り数量的には決して効果は上がらない。結果的に、自治体の過疎対策には程遠いのである。これに対して、セカンドスクールは「交流」型であって、「定住」型教育プログラムではない。学校と学校を繋ぐ「季節移動」型の教育プログラムである。既存の田舎の学校にてこ入れして、施設の充実と宿泊施設の条件を整えれば、一定期間に限定して、体験活動、教育活動の充実を旗印として、多数の子どもを地方に移動させることが可能になるのである。

文部省は上記の通り「セカンドスクール」を選択せず、「少年自然の家」政策を選択した。結果的に、国公立を含めて社会教育施設の役人の数が増えた

だけで、過疎の自治体へのでこ入れには全くなっていない。福岡県篠栗町の「萩尾分校」では、学校の存続と地域の活性化を兼ねて、地区の共有林を伐採して資金を作り、山村留学生募集のための住宅を建設した。家賃は3万円である。定住を希望する家族ごと義務教育の留学生を獲得しようというものである。鳥取県会見町でも同じような試みが行なわれた。ここまでやれば希望者も殺到するのである。文部省や県の教育行政が過疎対策を兼ねたセカンドスクールの発想を一部でも取り入れていれば、学校の存続も地域の活性化もわけなく実現できたであろうに、と誠に惜まれることである。全国に何百の国公立の少年自然の家や青年の家を建設し、その職員に給料を払い続けていることを思えば、地元と協力して作るセカンドスクール施設は遥かに安く上がったであろう。過疎の村の雇用にも貢献し、新しい息吹を与えることも出来た。都市の学校との交流による教育効果は地元の学校を巻き込んだ全く新しい「総合的学習」を創造し得たかも知れない。それにひきかえ、「少年自然の家」は都市の学校の短期自然体験プログラムを教育行政の専門施設に分散しただけで、全国の自治体はもとより、過疎地の学校に分散することに失敗したのである。当然、過疎対策の助けには全くなっていない。

(4) 都市の学校と農山漁村の学校との交流

少年自然の家の利用は、長くて精々1週間。通常は、2~4日の短期である。利用者が、自らのプログラムを優先すれば優先するほど、他のグループとの交流もお座なりになりがちである。これに対して、セカンドスクール構想の場合は、地元の学校と合同・密着が条件である。当然、地元の学校との協力・交流は不可欠の条件である。自然条件を活用できる都市の学校の利点が多々あることはもちろんであるが、地方の学校も都市の学校から様々な刺激を受ける。合同の授業も可能になる。当然、都市の子と地方の子と一緒に遊ぶことも、生活を共にすることも可能である。教師間の交流も可能である。国土庁の発想は、「少年自然の家」構想の何倍も地域の社会／経済的条件を考慮している。過疎問題と格闘せざるを得なかった「山村留学」の歴史を顧みれば、「自然の家」構想が地域の活性化に如何に役に立たなかったか、

明らかであろう。過疎が進行して、山村留学や「住宅提供留学」に頼らねば、村の学校を維持することが出来なくなった現状から振り返る時、埋もれてしまった「セカンドスクール」構想は、いかにも惜しいのである。埋もれた提案は、「釣り落とした大魚」に似ている！？

セカンドスクール構想は、短・中期の山村留学制度の必修化・制度化を発展させたシステムである。システムが機能すれば、教育の地域間格差の是正、学校間格差の修正、子どもの欠損体験の補完、過疎地の経済的・文化的支援など多様な機能を同時に果たすことができた筈なのである。N町では近々に二つの学校が閉鎖される。セカンドスクールが実現していれば集落から子どもの声が消えなくて済むのであるが.....。

2. 森林ボランティアと生涯学習の結合

N町は広大である。県の10分の1の面積を占めるとお聞きした。町有林も広大である。しかし、人を雇用して森を守る財政的余裕はすでにない。かくして山は荒れて行く。講演の末尾でたとえばの話として筆者は「森林ボランティアと生涯学習の結合」を提案した。2007年は団塊の世代が定年を迎える。多くの定年者は労働から新たな活動への移行に失敗する。そうなればこれまで論じてきたように定年者は「自由の刑」の無聊と戦い、交流機会の貧困化の中で精神の活力を失い、社会から必要とされなくなった「存在の無用感」に打ちのめされる。生涯学習も生涯スポーツも選択しなければ、心身の機能は加速度的に衰弱し、降下する。医療や介護の世話になるのは時間の問題である。かくして2007年問題は「厄介老人」の大量発生を予感させる。

「森林ボランティアと生涯学習の結合」論は一度島根県H町でも提案したが実現していない。講演の終了後関係者の質問に答えて話しているうちに講演に費やした時間と同じくらい熱弁を奮っている自分に気付いた。聞き上手の助役さんや町長さんが相手だったのでますますのぼせ上がって喋った。以下はその

概要である。

(1) すでに田舎に「定住人口」をお招きする施策の失敗は明らかである。都市住民の多くは田舎への郷愁は感じてでも定住は望んでいない。

(2) それゆえ、過疎対策は「交流人口」の拡大に重点を置くしかない。しかし、特別な文化・歴史・観光の資源をもたないところへ都市人口を引き付ける事は容易な事ではない。交流人口の継続的大移動をシステム化する方法は上記の「セカンドスクール」構想であるが、政治が選択しない限り「絵に描いた餅」にならざるを得ない。

(3) そこで森林ボランティアである。N町の夏の平均気温は平地の町より5度低い。大都市のメディアと組んで季節にあった「田舎暮らし」と「地球にやさしい森の守役」を提案する。通常、役場の職員ではこの種の企画の営業はできない。メディアの「案内機能」と「価値付与の機能」に任せるべきである。応募定員は100名。100名にならないければキャンセルすると

初めから謳っておけば良い。この時の参加人員は政治と同じく「数は力」である。午前中は地元の森林組合の指導を受けて森の整備作業に当たる。午後は原則自由。生涯学習や生涯スポーツのグループ・サークルに分かれて活動する。活動場所には公民館はもとより廃校になる学校施設を活用すればよい。週末は家族の日と定めてそれぞれの家族の訪問を歓迎する。

(4) 町には使わなくなったかつての中学生寮があるのでそれを若干改修して住居を提供する。朝食は個人負担とするが、ウィークデーの昼と夜の食事は町が費用弁償のつもりで負担する。昼は森の作業の後に食べる弁当になるが、夜は町のレストラン・食堂の協力をえて「自由食券」を発行して好きなところで食事をしていただく。午後の自由時間と夕食の団欒を通して生涯学習やスポーツのグループ・サークルが生れるはずである。レストランはお客を獲得するためにメニューもサービスも工夫をする。筆者はかつてドイツの田舎町でドイツ語を学んだ時このシステムを大いに楽しんだ経験を有している。

(5) この種の企画に応募してくる人々は総じてエネルギーがある。興味・関心も豊かで、好奇心旺盛である。腕に覚えのある人も多いはずである。講座を開設する人も出るであろう。展覧会やコンサートを企画する人も出るであろう。学校のゲスト・ティーチャーを引き受ける人も出るであろう。生涯学習・スポーツは彼らの活力と能力を引き出し、地元住民との交流を生み出すであろう。

(6) 週末の家族の訪問には赤字で苦しむ「第3セクター」の温泉施設などを割り引き制度で活用するのである。1~2か月経てば「経験の共有」が「同じ釜の飯」に進化する。森を守る苦労を共にした分だけ人々の連帯は深まる。活動の経緯は小さな石に刻んで手入れをした森の入り口に飾れば個人の貢献の歴史が顕彰される。人生には「語り草」が不可欠なのである。町に溶け込んだ優れた人々はやがて町の広報大使に育って、次の活動に繋げて行くであろう。

(7) 旅費も日常経費も保険も装備も基本的に個人の負担とする。町は住民の親切と住居と限定的な食事を提供するだけである。結果的に町有林の荒れが少しでも止められるかも知れない。ボランティア本人の基本生活費は町に落ちるお金である。家族の訪問も町に落ちるお金である。生涯学習まちづくりはそれが町の繁栄に繋がるような施策にすべきである。各地で盛んなスポーツ大会や生涯学習まちづくり大会のような一過性のイベントに手を染めてはならない。この種の事業に関わっている多くの町の実態はお金は出て行き、ごみだけが落ちるのである。

(8) ”2007年問題と過疎対策の結合です。やる気があるのなら企画は引き受けますよ”と言って町を辞した。後日担当者からは到底自分達の「手に余る」と連絡があった。かくして夢の企画はいまだ夢のままである。

3. 後日談

3月には合併で「豊津寺子屋」の母体であった豊津町が消滅する。これまで報告してきた「豊津寺子屋」の事業は新みやこ町の豊津支所の事業となる。筆者は町長さんに顧問の辞表を提出した。その際四方山の話の中で「森林ボランティアと生涯学習の結合」論のいきさつを語った。町長さんのアンテナが動いて、眼が輝き、膝を乗り出した。新しい町にも広大な森林があるという。そこでやってみてくれませんか、という話になった。人の世の巡り合わせは面白い。

果たして夢の企画の実験は始められるか？





『みんなちがってみんないい』

今回は山口県での移動フォーラムであった。正式名称は「第1回人づくり、地域づくりフォーラム in 山口」への特別参加の形式をとったのである。

1. 「みんなちがってみんないい」

大会は関係者の理解をえて、山口県生涯学習センターが企画した指導者養成講座の研修生が全面的に大会の企画に参画した。大会が成功裡に終わった要因の一つは明らかに企画と運営の両面に渡った研修生の智恵と主体的参画であった。大会を貫く基本理念は金子みすずが歌った詩の中から「みんなちがってみんないい」とすることにした。大会要項のそこ彼処に金子みすずの名詩をちりばめ、合わせて挿し絵を書いた方の許可もいただいて詩と組み合わせでイラスト風にページを飾った。研修担当者の熱意がシンガーソングライターのちひろさんをお招きしてセミナーパーク大ロビーでオープニングのみすずコンサートを実現した。山口県は我が愛する中原中也や種田山頭火を輩出しているが、時代は個性や多様

化や明るいやさしさを求めている。生涯学習はみすずさんの時代なのである。祭もない、安売りバーゲンもない、お土産のプレゼントもない、客寄せパンダもない会であった。ひたすら固い「実践研究」と専門家によるフォーラムに500数十名の方々が泊まり掛けで出席し、夜の更けるまで議論に興じたことは特質に値するであろう。

唯一、柔らかいところを受け持ったのが研修生ボランティアであったろう。空き時間のピアノ演奏も、ふぐ汁の手配も、着物リフォームのファッションショーも、競り市の実施も、お客さまの接遇も、エンディングの歌も研修生が担当した。筆者としては「実践」を前提とした「研修」の有効性を再確認した思いである。

2. 「実践のために学ぶ」

山口県生涯学習センターの講座運営の目標は「実践する事を約束して学ぶ」である。暴論は承知の上だが、実践を約束しないのに無料の生涯学習講座は基本的に税金の無駄使いに終る。個々人が身銭を切って実行する分には何をどのように学ぼうと文句はないが、公金を投入する研修は別である。山口の研修では、「自分が行動に参加する気のないものは去っていただきたい」、と申し上げて研修を始める事にしている。生涯学習の実践は、他の人間行動と同じく、「学んでから実践する」のではない。「行動への意志」を前提にするから学ぶ事が多く、学ぶことが主体的になるのである。行動への意志を前提にしなければ理論は身に付かず、頭が理解できても本人

は理論と実践の谷間を跳ぶ事はできない。

大会の中で筆者がお聞きした実践事例のすべてが実践から始まり、実践の中で進化したプログラムであった。穂波町の「子ども学び塾」も、高知県の山中節子さんの図書館クラブの読み聞かせも、広島の中村由利江さんの紙芝居交流も、佐賀市女性の会の「パートナーデー」や男女共同参画の寸劇活動も、同じく佐賀県の谷口仁史さんの少年問題相談事業もすべて実践から出発している。これに対して従来行政主導型で実施してきたほとんどのボランティア養成講座も、老人学級も、高齢者大学も、その他の趣味・教養講座も、「学んだ成果を社会に還元してください」というように「学習」から出発する。実践と学習

の位置づけが逆転しているのである。学んでから実践ができた試しは少ない。現象的に、「学んだ人」が「実践している」ように見える場合もあるが、大抵はすでに実践中の方々が学ぶから実践に繋がっているように見えるだけである。学校の教室で学んだ者が地域で実践をした例など寡聞にして聞かない。教育界は指導者の理屈が先行し、自らの実践が稀薄である。「学んでから実践する」がどんなにまことしやかに語られても、事実上、理論と実践の深い谷を埋める事はできない。生涯学習行政においてすでに何十年も沢山の研修を重ねて実践の結果はほとんど

出ていないではないか！！山口大会が実践研究を重んじたのはそれ故である。沢山の方々が集まってくださったのもそれ故であろう。今回、九州女子短期大学の学生諸君がボランティアとして参加してくれたのも「志は行為の中から生まれる」ことを古市教授以下の関係者が期待した故であろう。果たして学生諸君は何をどのように学んだのか？それとも企画に参画せずに大会を支援する作業に関わっただけでは疲労感だけが残ったか？是非お聞きしたいものである。

3. 運営の修正は「今」こそ好機である

大会は成功したと思う。移動フォーラムもそれなりの役割を果たす事ができたと思う。何よりも多くの人々の参加と感想がそれを証明している。終了後、さっすぐに中原所長からお礼のメールをいただいて恐縮したが運営の問題点を修正しようとするならばそれは「いま」であると書き送った。特に大会の企画に参画し、合わせて運営の陰の部分を担当した講座研修生の思いが熱いうちに夢や希望を聞いてみたかった。運営の具体的状況に付いても、どこに問題があったか、何をどうすれば次の会の改善に繋がるのか。すでに後の祭りであるが、研修講座の最終まとめの「番外編」を大会後に組んでおかなかったことを後悔している。実践後の修正提案と評価こそが実践者の最大の学習機会である。Plan-Do-See の管理運営サイクル論の核心はそこにある。筆者の感想は沢山あるがとりあえず書いておきたいのは以下の2点である。

(1) 対等の原則

生涯学習の大会は参加者対等の原則を貫徹すべきである。最小限の礼儀は当然としても要人や講師の度を越えた特別待遇は大会の理念と雰囲気破壊する。出席もしない講師や要人の名前を貼って会場の前部座席を空席にし、熱心な参加者に立ち見をさせるといった事などが一例である。食事と同じである。出迎えも同じである。度を越えた特別待遇は「分離」や「隔離」になりかねない。特別待遇にこだわって対等の原則を拒否しそうな講師や関係者は呼ばな

いに越した事はない。生涯学習の実践は社会的地位で行うものではない。才能のある人でもスターになりたがって、人々を「鑑賞者」と「創造者」に二分する傾向のある人を呼んではならない。生涯学習は国民の底上げが目標である。一人ひとりのエネルギーと発想が勝負である。

(2) 研究と交流

実践研究とその向上のための交流が目的であれば、余興はいらない。美しいものに余計な飾りがいらぬように実践研究に余計なエンターテイメントは不要である。余興が必要な人はサーカスカレジャラランドへ行けば良い。所詮、生涯学習はパチンコやさんには歯が立たないのである。余興を提供する事は、時に、グループにとっては実践の一環であるが、その場合はプログラムに「遊び」を持たせて見る側の選択の自由を保障できるスケジュールにすべきである。見たくない人の自由を奪い、移動できない人々をその場に「監禁」して参加を強要するのは「いつでもどこでも」の基本原則に反する。懇親の食事と同じである。食事は大切であるが、大会の参加者は食事に来たのではない。パーティーは席を固定せず、立食で人々の移動を保障しなければならない。旧交を温めることも大切であるが、実践研究交流会は「実践」を手がかりにして未来の同志に出会う人間探険の舞台であるからである。生涯学習のキーワードは「主体的な選択」である。

子育て支援「ボランティア指導者」の評価と意見

◆ I ◆ 調査結果の概要

1. 調査対象者：総数110名、調査票提出者44名（回収率40パーセント）（2学期の指導に参加しなかった指導者からの提出は少なかった。）

2. 調査方法：郵送法と留め置き法の併用

3. 評価結果の要約

(1) 「寺子屋」事業に対する評価は極めて高い。

(2) 指導者の熱意と努力、工夫の跡は歴然としている。

(3) 指導の結果、子どもの成長は極めて大、ただし、評価の視点は多様である。

(4) 指導者自身の得たところも極めて大、ただし、評価の視点は多様である。

(5) 「寺子屋」事業の存続に対する支持は全員であった。

◆ II ◆ 質問項目は5問である

1. 子ども達の2学期はいかがだったでしょうか？先生は寺子屋のご指導を楽しまれたでしょうか？先生がもっとも留意して子ども達の指導を行なった事例を2～3ご紹介ください。

2. 寺子屋では異年齢の少年集団を考慮した様々な活動を準備いたしました。先生方の日々のご指導の中で、寺子屋活動の教育効果がなんらかの形で見られたでしょうか？（2項選択制）

3. 「寺子屋」事業は先生の日々の生活にどのよ

うな意味をもっているでしょうか？（2項選択制）

4. 親子説明会で申し上げた通り、寺子屋では地域の子どもの「安全」と「生きる力」の向上を目指しています。寺子屋事業の内容や方法について、ご意見、ご感想がありましたら自由にお書きください。

5. いよいよ3月には合併が実現します。「寺子屋」事業が継続できるか、否かは政治の決断ですが、「有志指導者」の皆様のご意見はいかがでしょうか？

◆ III ◆ 分析

1. 子どもは様々な点で確実に成長した

次にかかげたのは子どもの成長を評価する視点の一覧である。寺子屋のプログラムは「体力」と「耐性」の向上を重視したが、指導者の評価は多様に分散した。以下は評価者の多い順に並べ直した子どもの成長項目である。

(1) 友だち仲間や集団生活への適応 17名

(2) 物事への集中力・持続力の向上 12名

(3) 物事に対する意欲や積極性の向上 10名

(4) 基本的な礼義・作法の習得 7名

(5) 家族や友だちに対するやさしい行為や思いやりの態度の実践 7名

(6) 協力する態度 6名

(7) 気に入らない状況や辛い条件にも耐えられる

- がまん強さ 5名
- (8) 義務や役割を果たす責任感 5名
- (9) 体力の向上 3名
- (10) 学力の向上 2名
- (11) その他() 2名
- (12) 言葉使いや表現力の向上 0名

2. 子どもの反応に対する指導者の感想と意見

(1) 指導者の意見は多様であった

誰しもが子どもの成長を高く評価しているが、その視点は多様であった。選択肢を細かく分け過ぎたことが影響しているのであろうが、具体的に指導者の関心を垣間見てプログラム立案の参考になった。「集中力・持続力」と「意欲・積極性」は表裏一体であろうが、「受け身」の持続を重視する先生と「攻め」の積極性を重視する先生がいらっしゃるのである。

(2) 指導者は子どもの潜在能力に感動している

「自分達が覚えられない教材を短時日のうちにマスターして行くことに驚く」とか、「指導の期間が空いた時、次にあった時の子どもの変化に目を見張る」などの感想がたくさん見られる。

(3) 評価の根拠は子どもの言動の一致である

子どもでも言葉は飾ることができるが、基本的に行為と態度はごまかしが効かず、指導者の信頼を裏切らない。多くの指導者は子どもの言動一致を観察している。我慢強くなったことも、いたわりが出てきたことも、集中が見られるのも評価の根拠は子どもの言動の一致である。

(4) 『指導者間の意思の統一が必要ではないか？』

どの子ども集団にも「お調子者」がいて、「寂しがりや」がいて、「引っ込み思案」がいる。子どもは指導者の顔色を読むことは名人である。従ってなめられる指導者もいる。そこに教育の面白さがあるのであるが、苦労もある。支持に従わない子ども、自分勝手にふるまう子どもに手を焼いている指導者の姿が彷彿としている。厳しい先生と叱れない先生の感想のギャップが散見された。『指導者間の意思の統一

が必要ではないか？』というのはやさしい先生のご感想であろうか！子どもを服従させることは決して難しいことではないが、拙速は禁物である。

(5) 『成果にこだわり、発表会のための指導をすべきではない！！』

寺子屋は現代の教育界とは子どもへのアプローチが異なる。それゆえ、指導の成果を保護者や指導者の皆さんに定期的にご披露して事業の意義の理解を得ようとしている。それが学期ごとの発表会である。発表会が近づくと当然立派な発表をしたいと実行委員会も、事務局も、恐らくは個々の指導者も指導に力が入る。そうした雰囲気が行き過ぎ、活動のゆとりや楽しみの過程を忘れた時、『成果にこだわり、発表会のための指導をすべきではない！！』という感想が出るのであろう。感想の背景には、「過程」と「成果」、「日常」と「非日常」、「ゆとり」と「緊張」、「普段の学習」と「受験勉強」のような関係が存在する。

どちらを否定しても子どもの発達は上手く行かない。要は「さじかげん」であるが、指導者によって「さじ加減」の基準が異なるので、「発表会がんばれ！」というアプローチと「発表ばかりにこだわるな！」という意見が割れるのであろう。割れるくらいで丁度いい！と総括をしたら叱られるか？

3. 活動は指導者ご自身の役に立っている

次にかかげたのは子どもへの指導が指導者自身のどんな役に立っているかを示す視点の一覧である。寺子屋の指導は大いに役に立っているが、ここでも指導者の評価は多様に分散した。以下は評価者の多い順に並べ直した「役に立った訳」の項目である。

- (1) 寺子屋の生活指導を通して地域の大切さが分かった。 16名
- (2) 子どもの指導を通して自分自身の心身の活力・健康が向上した。 15名
- (3) 自分が役立ち、自分の能力を発揮するのは楽しい。 11名
- (4) 多くの保護者、仲間との交流・コミュニケーションが向上した。 10名
- (5) 育児・教育の応援をすることで多くの家族の役

に立てていると思う。 8名

(6) 自分が必要とされ、やり甲斐・生き甲斐を見つけられた。 7名

(7) 寺子屋指導は自分の家族内のコミュニケーションを深めた。 5名

(8) その他() 5名

4. 指導者の自己分析

(1) 意義を発見できるのは「自分が勉強する」からである

子どもに教えるためには自分も勉強する。自問自答もする。「有志指導者」の間で意見の交換もする。そこから様々なものが見えてくるのである。

(2) 子どものエネルギーは自然の刺戟である。

子どもはエネルギーの固まりである。子どもは飛び回り、向上し、反抗し、はらはらさせ、指導者を多方面から挑発する。子どもの存在そのもの、子どもとの接触と指導の緊張が指導者の活力を引き出している。お元気になるのは「刺戟」と「負荷」の両方を子どもとの接触が生み出しているからである。

(3) 「子縁」の自覚

子どもの指導は出会いの縁を生んでいる。それが「子縁」である。「お会いすることのない方々との交流」、「話をする筈がない世代との出会い」が生まれたことを感謝している。「町へ出れば、子どもから声がかかり」、これまで全く知らなかった子どもとあいさつを交わしている。「知らない人には返事もしない世の中で嬉しいこと」です。

(4) 恩返し of 思想

「育てていただいた大切なものを次世代に繋ぎたい」。「自分達は周りの大人に見守られて育った」。子どもの指導は「50年近くの生涯学習の総決算」になる。

(5) 「役に立っている」と思えなければ継続はできない

「必要とされることは嬉しいこと」です。「娘の子育てを思えばよく分る」。「核家族／共稼ぎ家族の子育ては難しい」。指導者も実行委員会も事務局も寺

子屋の活動は家族を支え、子どもの成長を助けているはずであると信じている。「信じていなければ続けられない」とは言い得て妙である。

(6) 指導者相互の協力と共同が楽しみ

同じ目標をもち、似たような興味・関心の同志との交流が楽しみである。秘められた意欲、隠れた才能との出会いは本当に刺激的である。

(7) 保護者の世代との会話も増えた

日本文化は礼儀正しい。保護者の多くは丁寧に指導者にあいさつやお礼を申し上げる。そこから予想外の世代間交流が芽生える。指導者が自らの「社会貢献」を実感する瞬間でもある。

5. 指導者はどんなことに心をくわしているか？

(1) 「接し方」の難しさを自覚して、勉強しながら指導にあたった。

(2) 低学年時の教育がどんなに大切かを痛感して指導している。

(3) 「手は出すまい」、「叱るより誉めよう」、「平等の処遇」のは難しい。

(4) 子どもが「聞けなければ」教えられない。

(5) 「子どもと一緒に、対等に動きたい」師弟同行を目指している。

(6) 指導者の打ち合せ、事前の準備作業が大切。

(7) 子どもを「叱る時」は「理由をはっきりさせる」。

(8) 「遅い子ども」、「不得意な子ども」が挫けないように。

(9) 一人ひとりの子どもの顔と名前を憶えて声を掛ける。

(10) 「答を教えず、自分でやるように」我慢強さを教えた。

(11) まず「あいさつ」「返事」から。

(12) 子ども表情に留意し、心身の状況に注意を払った。

(13) 「雰囲気づくり」「教材作り」「見本の提示」などに工夫をした。

6. 指導者の不満と要望

- (1) 指導回数が少ない。指導者配置がアンバランス。
- (2) 指導スケジュールが合わない。
- (3) 指導方法に不安がある。
- (4) 子どもの年齢差からくる能力差が大きく指導が難しい。
- (5) 指導に従わない子どもの指導が難しい。
- (6) 指導の焦点化、連続指導をしなければ体得の成果は上がらない。
- (7) 学校や行政の協力が不十分。
- (8) 机がなくて寝そべてハガキの書き方練習をするような状況はなんとかならないのか？
- (9) 関係者以外の無関心は残念である。

(10) 子どもに「負荷」をかけ過ぎていないか？

7. 子どもの安全をどう守るか？

「寺子屋」の存在そのものが安全の保障である。したがって、教育委員会や一般行政の姿勢が問われている。

8. 寺子屋の存続について

ほぼ全員が「存続」を主張し、支持している。支持の理由は寺子屋の成果の評価を反映している。



MESSAGE TO AND FROM

お便りありがとうございました。今回もまたいつものように編集者の思いが広がるままに、お便りの御紹介と御返事を兼ねた通信に致しました。みなさまの意に添わないところがありましたらどうぞ御寛容にお許し下さい。

★ 大分県香々地青少年の家 宮崎克己 様

子育てネットワークの大会資料ありがとうございました。孤立を免れ、「子縁」と「志縁」の人間関係に巡り会った方々の興奮と熱気を想像しています。子育ての充実感に加えた幸福な出会いの会であったであろう事は容易に読み取れるご報告でした。しかし、自己責任の時代というものは辛いですね。諸々の条件によってこのようなネットワーク集会に参加できない方々と参加者との「交流格差」も「情報格差」もますます拡大しますね。また、大部分の参加者は女性でしょうから、子育てはますます女性の役割として固定化されて行くような気がします。政策的な観点から言えば、少子化の防止も、女性の支援も、恐らくは幼少年の教育の変革ですらも「養育の社会化」からしか実現できないと確信するようになりました。合併の後に福岡県穂波町の「子ども学び塾」や同県豊津町の「寺子屋」プログラムがどのような政策上の評価を受

けるのか、期待と不安をもって見守っております。

これからの子育ては「自分流の保育と教育」にこだわる保護者のネットワークと「社会の養育システム」に依存せざるを得ない「共稼ぎの親」やネットワークに参加できない「孤立した保護者」に2極化して行く予想しています。いずれの場合も生涯学習行政はほとんど関わって来なかった領域ですから「コーディネート」の機能が不十分である事は免れません。結果的に、国の政策予算は「次世代育成支援」の看板の下に教育経験が蓄積されていない福祉分野に移行すると思います。教育と福祉を統合して「保教育」の実践システムが重要になる所以であると思います。果たして政治や行政は理解するのでしょうか！？それとも従来の路線を固執して「子育て」は「親の責任」「女の責任」だと言い続けるのでしょうか？

★ 高知県野市町 山中節子様

人の世は人が作るという事を垣間見せていただきました。お集りの皆様の連帯も協力もお見事の一語に尽きました。福祉と教育の共同も拝見いたしました。惜しむらくはこのような「形」が行政では「プロジェクト」にもならないということですね。「偽装」や「粉飾」が続いて「民」は世間の信用を失っていますが、皆様の活動を拝見して、「民」に移した方が活性化するのは「民」に移すべきだという「総論」は間違っていないと思いました。校長先生も、保健所長も、町会議員さんも、塾の経営者も初めてお会いしたとは思えないほどに「志縁」を感じました。再び皆様とお会いできる事を楽しみに5月の25周年大会の準備を進めます。「高知『本』と『お話』ネット」の”修学旅行”とお考えになってお揃いでお出かけ下さい。

★ 福岡県北九州市 仲道正昭様

毎月お目にかかるのに誌上のお便りはいささか変ですが、報告書の中の受講者の感想を拝見して様々に感じるどころがありました。当日のテーマであった「論語」に託して申し上げれば、最初は『まず行う、その言はしかる後に之に従う』と思いました。実践をせずに口ばかりでものを言う人に怒りを感じます。2番目は『近きものよるこべば遠きもの来たる』でした。第3者の評論に惑わされず、自分に与えられた「寺子屋」や「生涯学習フォーラム」の実践を大事にした

いと思いました。第3はイデオロギー的な感想に接して『天を怨みず、人をとがめず』は自分にはできそうもない、と思いました。また、『備わらんことを一人に求めることなかれ』という「言い訳」も発見いたしました。最後は『徳は孤ならず、かならず隣あり』です。機会を与えていただいた上に、報告書まで作成いただきその熱意に満腔の敬意を表します。ありがとうございました。

★ 福岡県筑紫野市 鹿下 仁 様

お便りからご奮闘の様子が立ち上がってきます。学校便りを拝見いたしました。立派なものです。しかし、最大の心配は先生のメッセージはそのメッセージを必要とする保護者には届かないということです。上記の宮崎さんへの便りにも書きましたが、自覚的な保護者にだけ働きかけても教育の崩壊は食い止められません。「子育てネットワーク」論の落とし穴はネットワークを選択しない保護者を置き去りにし、「格差」を更に拡大する事です。学校はいわゆる「加配教員」を時差出勤にしてでも基本的な生活習慣が確立できていない子どもの放課後や休暇中の指導を開始すべきだと考えています。できるでしょうか！「穂波子どもまなび塾」や「豊津寺子屋」の発想を学校は受け入れるでしょうか！？月例フォーラムでの再会を楽しみにしております。

お知らせ

第65回生涯学習フォーラム

- * 日時：平成18年3月11日(土)15時～17時、
研究会終了後、センターレストラン「そよかぜ」にて夕食会を予定しています。どうぞご参加ください。
- * 場所：福岡県立社会教育総合センター
- * 事例発表：1 「福岡県穂波町教育行政の五年間一実践の成果と評価の方法」
(福岡県穂波町教育委員会 森本精造教育長、川原田寿史校長)
- 2 福岡県立社会教育総合センターの事業計画評価 (菊川律子所長)
- * 論文発表：2007年問題2:熟年の危機と生涯学習(三浦清一郎)

会場その他準備の関係上、事前参加申込みをお願い致します。(担当:恵良)092—947—3511まで。

向老期は「衰弱と死に向かった降下」が宿命である。心身機能の降下のカーブを緩やかにする事はできてなん人も降下そのものを止める事はできない。筆者にも降下は着実に続いている。今後は確実にやってくる人生の「無常の風」を予想しなければならない。2006年は「風の便り」の購読の更新にあたって、読者に不慮の事故や病いによる中断の場合のお断りを事前にお願した。中断を想定した「未来のわび状」はすでに書いて、日本とアメリカで「便り」の編集／公開を支えてくれた人々に託した。

個人の日々においても「老い」を想定した引越しを実施した事はすでに書いた。しかし、現実には筆者の想定以上にすさまじい。知人の外国人の妻が日本人の夫の死に直面した際、日本人の親族になんとも情けない処遇を受けた事を見聞した。日本人の敵が日本人になりつつある事は我が身の回りでも起り始めている。海を渡って異国へ来た妻に後顧の憂いがないよう遺書も書いて渡した。振り返れば我が人生は、自分自身にも、努力の結果にも大いに不満であるが、今更悔いても詮無いことであろう。どこかで区切りの覚悟を決め、過去の軌跡にも「足る」を知るように心掛けたい。

今年は中国・四国・九州地区生涯学習実践研究交流会の25周年である。福岡の実行委員と事務局はすでに開催プログラムの準備を開始している。福岡教育大学の小さな教室から始まったささやかな実践研究が25年に渡って続いたのは志を同じくする多くの人々とのご縁の賜物である。本年筆者は敬老の日紅白まんじゅうが届いて名実共に高齢者の仲間入りをした。

これまで「志縁」に賭けて様々な挑戦を試みたがそろそろ区切りの課題も出てきた。本年5月には大会の「代表世話人」を辞任する事に決めた。「志縁」の判断は決して簡単ではない。「志縁」であると思っ

たものがそうでなかった事は、大学改革の失敗をはじめ沢山ある。そうした思い出は自分の気持ちの中に今も不快に沈澱している。「実践研究交流会」は幸運にも例外的に成功した事例である。また、近年、時間とエネルギーを注いだ「豊津寺子屋」の実践も同様の幸運に恵まれた。

しかし、「寺子屋」の母体である豊津町が合併に伴って3月には消滅する。豊津町が消滅する以上こちら区切りの時期である。過日、畑中町長にお目にかかって顧問の職を辞した。政治の理解と担当者の献身的な努力が「寺子屋」の実践を支えた。実行委員会の皆さんを含め関係者との「志縁」が「寺子屋」の基本であった。合併の先に何が待ち受けているかは不明である。しかし、共通の「志」が残っている限りこの世は「志縁」に賭けて挑戦し続けるしかない。判断が難しかろうとなかろうと、「志縁」の人間関係こそが最も筆者を奮い立たせ、もっともやり甲斐を実感させる。この世の希望はそこにしかない。今回ようやく学文社の理解を得て10年ぶりの出版を果した。ここにも未来の「志」の縁を感じざるを得ない。再び気力を奮い立たせて新しい挑戦に赴く。希望を失わない限り青春は続くとサミュエル・ウルマンは書いた。筆者は青春が続くとまでは思えないが、「志縁」に賭ければ少なくとも先へ進む事ができると実感している。

お知らせ：

「風の便り」及びフォーラム論文に発表してきた少年教育論のまとめを学文社から出版いたしました。書名は「子育て支援の方法と少年教育の原点」(¥1,890)です。ご興味がありましたら書店又は筆者までご一報下さい。

『編集事務局連絡先』 (代表)三浦清一郎：〒811-4177 宗像市桜美台29-2

TEL/FAX 0940-33-5416 E-mail sdmiura@fj8.so-net.ne.jp

『風の便りの購読について』 購読料は無料です。ただし、郵送料の御負担をお願いしております。2006年もご継続を希望の方は、『編集事務局連絡先』まで、90円切手10枚、または現金900円をお送りください。

『オンライン「風の便り」 <http://www.anotherway.jp/tayori/>